学生の声

「日本での留学」

電気工学専攻　発送配電研究室　博士課程　Boonchai TECHAUMNAT

私は四年前に初めて日本に来ました。日本で留学することは全く考えていませんでしたが、タイの大学の先生に推薦して頂いたおかげで日本に来ることが出来ました。

四年間の日本の留学では様々な想い出が出来、一生忘れられないと思います。最初の頃は日本語を話すことが出来なくて不自由を感じました。早く上手になりたいと日本語専門学校にも通いましたが、なかなか上達しませんでした。幸い日本の先生および研究室の友達がとても親切で、だんだんと日本の生活に慣れていきました。

日本に来てから、タイでは考えていなかったことに幾つか気が付きました。日本はタイと同じアジア国ですが、気候からしてかなり違いがあります。タイは亜熱帯国で一年中暑いですが、日本は季節によってかなり気候が変化します。その季節の変化から時間の経つことを知らせてもらえることがうらやましいです。

更に違う環境で住んでいることでタイと相違することが沢山あります。それらについて考えみたら、かなり面白くなりました。どちらの方が良いか正しいかという問題より、なぜこういう風に違うかと深く考えたら、少しずつ理解できるようになりました。

私は「数値電磁界計算」について研究していますが、それ以上のこともたくさん勉強になりました。研究の仕方、研究についての物事の考え方、技術の知識なども身につきました。卒業後は帰国してタイの大学に戻りますが、日本で学んだことを全力で国に役立たせていきたいと思います。

「短縮」という制度について

電子物性工学専攻　松重研究室　博士後期課程1年　福　間　剛　士

現在、博士課程への進学を経済的な理由により断念する学生は多い。確かに、27歳にもなって無収入でかつ授業料を年間50万円近く払わなくてはならないという状態は、多くの人にとって受け入れ難い選択肢であろう。

このような現状を打開するためのアプローチには次の2つが考えられる。それは博士課程の学生の増収を図るものと、博士号を若年期に取得し得る制度の導入を図るものである。前者の代表例としては、日本学術振興会特別研究員を挙げることができる。しかし現在、このポストの採用可否は進学と就職の決定を迫られる時期より後に通知されるため、進学を決める根拠にはなり得ない。一方、後者の例としては、近年大学に導入された「短縮」という制度を挙げることができる。これは通常より短い期間で、単位の取得、卒業研究、学位論文の執筆をすべて行って卒業する制度である。

私は平成12年の10月に、修士課程を短縮して博士課程へと進学した。これは京大電気系では初めてのことであった。この短縮という制度には、博士課程への進学に対する経済的デメリットを軽減すること以外にも、重要な意味がある。これまで京大電気系の修士課程には、事実上「頑張った人も、頑張らなかった人も仲良く2年で卒業」といった風潮があった。しかし、短縮制度が一般的なものとなれば、「努力次第でより早く卒業」といった状態になるだろう。前者は社会主義に、後者は資本主義に似ている。少なくとも、「どちらがアウトプットを吐けるか?」という点に関しては過去の歴史を振り返れば明らかだろう。

私は多くの学生が短縮できるようになるべきだとは全く思っていない。多くの学生に「頑張れば短縮できる」という認識を持って、充実した研究生活を送って欲しいと願っている。